

銀のスプーン

32集

銀のスプーン ベンクラブ

銀のスプーン

32集



銀のスプーン ペンクラブ

西行ゆかりの地に
「音にさく」歌碑

川西の公園で除幕

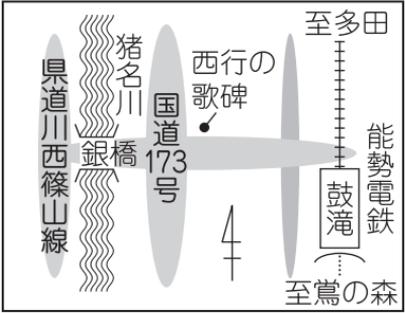


除幕された西行歌碑。川西市多田桜木一丁目。

「音にさく」鼓ヶ滝をうら
ちみれば 川辺にさへちやも
「白百合の花」
平安時代の歌人西行が、
在の川西市でこの歌を詠ん
だとする言い伝えがあるこ
とから、市内の有志たちが
海に沿い同市多田桜木一丁
目の下瀬公園に歌碑を建
て、三日、除幕式をした。
歌碑建立は、文芸雑誌

「銀のスプーン」を編集し
ている三宅啓さん(左)の
呼びかけで、市西上会市
文化協会(右)の有志八人委員
会をつくり、計画した。高
さ約一・八メートル、幅約八十センチの
御影石で、約百五十円を
かけた。「西行ゆかりの
地」であるのを市民に広
く知ってもらい、いずれは
観光資源の一つにと、の願
いを込めている。
同時に、阪神大震災の悲
惨さを後世に伝えるためにも
歌碑を役立てようと、機
材をテーマにした短歌を辦
発し、応募のあった三十六
首を歌碑の下のタイムカプ
セルに埋めた。西行の没後
九百年にあたる二〇九〇年
に掘り起してもう一つも
りだという。
代表世話人の森村藤雄・
市商工会会長(右)は「猪名
川の湧らぬが、ほととぎす
く花のかれんさを対比さ
せ、当時の川西の光景を見
事に表した歌だ」と思う」と
話していた。

平成9年11月4日付・朝日新聞



まえがき

阪神淡路大震災から十六年が経ち、神戸にも平和が訪れたと三十集で日本ペンクラブ「平和の日」の感想に書きましたが、日本にまた大変な災害がやってきました。

三月十一日の東日本大震災は、私達の記憶にある大震災とは比較できないものでした。テレビの映像でしか知ることはできませんが、黒い水が押し寄せ、家や車を、人を飲み込んでいく自然の恐ろしさにおののきました。神戸の震災では瓦礫となった街がそこにありましたが、今回の地震・大津波ではそこに何もありません。被災された人々の心情を思うと言葉がありません。さらに不幸なことに、福島第一原発の事故は取り返しのつかないものでした。まさに目に見えない恐怖に人々はおののき、東京電力や政府の言ってきたことが偽りであったこと、事故の対応の不手際があきらかになりました。人々の怒りは、嘆きは計り知れません。

亡くなられた方々の冥福を祈り、体や心に傷を負われた方々、家族や家や仕事を失った方々が一日も早く平和を取り戻されますよう願ってやみません。

二〇一一年は『銀のスプーン』にとっても大変な年となりました。発行人の三宅啓弘(啓

正)さんが九月七日肺気腫で亡くなりました。昭和六十二年(一九八七年)十一月に第一集が発刊されて二十五年になります。三宅さんが『銀のスプーン』にかけられた情熱は大変なものでした。三宅さんによって営々と築かれてきた、この市民の文化、地域の文化をいかに引き継いでいくかが問われています。

三十二集の企画テーマを「夫婦・家族」「大震災・大津波・原発事故」と設定しました。ペン友、眉村卓さんの『沈みゆく人』が話題になり、『僕と妻の1778の物語』として映画化されました。ここから「夫婦・家族」としたのですが、東日本大震災によってこのテーマはさらに関心を集めることになりました。作品を四つにまとめました。

大震災・原発事故 家族の絆 北上弘美さんは自由詩の形でその悲しみと怒りを、元海文堂書店社長で島田ギャラリーの島田誠さんは神戸の大震災の経験の上に震災後の東日本の文化復興のために「アーツエイド東北」設立の動きをよせてくださいました。浜本純逸さんは放射能汚染から国のあり方を、速水妙子スヴェンソンさんは世界語になった「つなみ」について、福留正治さんは生を受けた会津若松への思いを書かれました。

池上正示さんに『妻に捧げた1778話』の読後感をいただきました。池上さんは十一月に

「本妙寺の近代遺跡―仁王門と清正公銅像が語るもの」で第三回熊本県民文学賞の第二席で入賞されました。前川晋さんは八十歳で心臓手術を受けられ、ベッドから家族への思いを書かれました。尾島生子さんは最近原稿が書けなくなったと言われていたなかで久しぶりの登場、生い立ち、父への思いをしっかりと書かれました。初参加の徳永菊代さんは戦後の混乱から今日までの生い立ちと桜への思いを、別宮靖敏さんは三十一集に続き、生成学園から歩んだ人生を書かれました。この三作品はいずれも戦後の混乱の中から今日までを綴ったもので、昭和一桁生まれの思いが凝縮したものとさえ言えましょう。

俳句・随筆 俳句は常連の大和齊さんと初参加の辻井章（柏章）さん久江（桃花）さん。辻井さん夫婦は俳句教室に通っておられます。随筆は読者にいつも人気のある北上弘美さんが四作、福中保江さんが二作を、浜本純逸さんは地域での文学講座から女性の生き方を、牧彰さんは人の出会いについて書いてくださいました。初参加の鈴木正二郎さんは日本語学校での留学生に対する熱い思いを、村山茂さんは日頃の疑問を、恩田は丹波での農作業の記録を載せています。

旅・歴史 池上正示さんは特急「くまがわ」の旅の感激を、初参加の小森宰平さんはミクロ

ネシア連邦を支援するNPOの理事長で、前集の荒木芳雄さんに続いて最後に残された楽園ミクロネシアの素晴らしさを、ヴェトナム在住の新妻東一さんは歴史の疑問を、初参加の河合成一さんは日豪協会の会員でオーストラリアの素晴らしさを伝えてくださいました。ジャーナリストとして西サハラ独立問題を取り上げられてきた平田伊都子さんは、八月に西サハラ難民亡命政府日本代表事務所を自宅に設立されました。一月のだべりんぐ茶論で椎名麟三生誕百年について講演いただいた作家の田麿新さんは、十月に大阪梅田のジュンク堂で椎名麟三記念展を主催、また随筆『風吹く明日に』（宝塚出版）を上梓される忙しいなかで寄稿いただきました。

田中惇さんからは戦中派の話に必ず登場する八月十五日の「終戦の詔書」についてのエピソードと現物の写真をいただき、その戦時の思いを忘部真司さんは紙芝居「太郎の学童疎開」と表現されました。郷土歴史家の菅原巖さんには川西の地名についての考察をいただきました。

三宅さんを偲ぶ 三宅啓正さんの告別式は二十三年九月九日十二時から川西飛翔殿で行われました。大塩川西市長はじめ二百名を越す参列があり、生前の広い交友が偲ばれました。奥様にお願ひして三宅さんのメモの中から十七句をいただき、遺作として掲載しました。

ペン友に追悼文をお願いしたところ大塩市長はじめ十五名の方から寄稿いただきました。岡

やすえさんは秋の叙勲で「旭日小授章」を受けられました。前市長の柴生進さん、川西市議の津田加代子さん、池田中学の旧友水務さんからも寄稿いただきました。

寄稿は初参加の七名を含め三十四名に達し、十二集以来となる三百ページを超える大冊となりました。このほかにも寄稿の意向をいただきながら編集者の怠慢から果たせなかつた方々、闘病のために断念された方も多数おられ、三十三集へ引き継がれることを願っております。闘病中の方々の一日も早いご回復を祈っております。

今後の出版体制 発行人の三宅啓弘さんが亡くなり、今後の発行について新しい体制を構築することが必要となりました。寄稿者、読者、編集局など関係者の皆様のご意見をうかがう機会も設定し、新しい体制でスタートしたいと考えております。

三十三集の原稿募集 三十二集の発行が三ヶ月遅くなりましたが、三十三集は本年末には発行したいと原稿をお待ちしております。投稿規程は従来通りです。企画テーマについても提案をお待ちしております。

二〇一二年三月 編集長 恩田怜

編集委員 芹生弘、村山茂、池上正示

目次

まえがき

大震災・原発事故 家族の絆

災難を越えて……………	北上弘美	12
ゼロからの出発……………	島田誠	19
三度目のカナリア……………	浜本純逸	27
——東電第一原子力発電所事故に思う——		
「つなみ」 スウエーデン便り(3)……………	速水妙子スヴェンソン	36
会津若松を想う……………	福留正治	42
『妻に捧げた1778話』眉村卓著(新潮新書)を読み終えて……………	池上正示	50
「心臓手術」で「心やすらかに八十路を生きたい!」……………	前川晋	54
雨にも負けず風にも雪にも負けず……………	尾島生子	67
桜基金 想い出と桜……………	徳永菊代	108

人生七十八年	別宮靖敏	119
俳句・随筆		
春暁（俳句）	大和 齊	136
朝顔（俳句）	辻井柏章・桃花	138
異星人	北上弘美	140
落葉	北上弘美	142
歳を重ねて	北上弘美	144
組板の鯉	北上弘美	146
夏の陣・物忘れ	福中保江	148
お関幻想	浜本純逸	150
——『十三夜』樋口一葉を読む——		
果たされなかった『約束』	牧 彰	155
ある卒業式	鈴木正二郎	158
後部座席のシートベルトがつけにくい	村山 茂	165
丹波楽農日記（3）	恩田 怜	167

旅・歴史

特急「くまがわ」の旅	池上正示	180
緑の海に魅せられて	小森宰平	185
小松清とホー・チ・ミン	新妻東一	190
オーストラリア物語（一）	河合成一	195
世界最後の植民地「西サハラ」独立のために	平田伊都子	201
国連に「99%の貧者が殴りこみ		
二生誕百年、故郷は椎名麟三を見捨てず	田麿新	210
終戦の詔書	田中惇	219
紙芝居「太郎の学童疎開」	忌部眞司	224
「矢間」は「谷地」	菅原巖	248
川西市の字名「矢間Ⅱやとう」は「谷地Ⅱやち」「谷Ⅱやと」の転化		
三宅さんを偲ぶ		
遺作（俳句）	三宅啓弘	254
追悼の言葉	大塩民生	256

三宅さんを偲んで……………	岡	やすえ	258
三宅啓正さんとの思い出の時間……………	津田	加代子	260
三宅先生お亡くなりになって……………	雨森	育代	263
三宅啓弘先生のこと……………	池上	正示	264
三宅啓正氏を偲んで……………	忌部	眞司	268
追悼……………	尾島	生子	270
三宅啓正さんを偲んで……………	柴生	進	272
三宅さんと私……………	菅原	巖	274
三宅さんの死を悼む……………	芹生	弘	276
先生を偲んで……………	福中	保江	278
偉大な三宅啓正さん……………	村山	茂	280
三宅先生を偲んで……………	北上	弘美	282
出会いと別れ……………	水本	務	285
三宅さんのこと……………	恩田	怜	288

あとがき

「音にきく鼓が瀧」西行歌碑、だべりんぐ茶論

寄稿者紹介

大震災・原発事故
家族の絆



災難を越えて

北上 弘美

東北地方に大地震だ

テレビから突然警報音が鳴り緊張が走る

国会中継の映像は 揺れる仙台の市街地に切り替わった

津波警報のテロップが忙しく流れる

阪神大震災の被災体験が稲妻となつて蘇る

冷静を装うアナウンスは繰り返す

高台に非難するよう繰り返す 繰り返し繰り返す

津波は来た 海面は山のように持ち上がり

港の船を倉庫を 家を車を街を 全てを

大きな渦に巻き込んで

ぐんぐん押し流していく

一台の白い軽トラックがライトを点け

クラクションを鳴らし続けている

ああ生命が：

この残酷な映像が この凄まじい映像が

どうか夢であってほしい 手を合わす

街は消えた

波の引いた跡は

音を失った灰色の世界 地獄絵だ

白い海鳥が戯れ飛び交う姿は哀しい

驚愕のあまり身体は硬直し言葉は出ない

アナウンサーの上ずった声は 生命を案じる必死の祈りだ

息づく間もない中継は おわる事なく続くのだ

二〇一一年三月一日午後二時四十六分

空前絶後の悪夢の始まりである

マグニチュード九・〇の大地震は

二万六千余人の死者行方不明者を出した

学者や政治家 防災関係者は口々に

想定外の大津波 想定外 想定外と

自然を甘く見た想定

指定避難所に逃げ込んで 悲しくも

海の藻屑と消えた幾千もの尊い生命

この不条理を想定外で済ますのか

子を親を 妻を夫を 愛する人を失くしても

砕けた希望を手繰り寄せ

同胞一丸となって絶望の淵から這い上がる

被災者の小野寺京子さんはインタビューに答えた

「街に出た 街は瓦礫の山だ 帰る道も迷う程

自然が相手では…悲しさを越して言葉もない

死ぬわけにもいかず 人間も止められない」と

悲憤の涙の奥深く 自然の業と甘受して

畏敬の念さえ懐きつつ 着実に明日の希望に繋ぐのだ

災いはもう一つの災いを突きつけた

東京電力福島第一原発の事故故だ

人類はパンドラの箱を開けた

人工放射性元素を地球に生み落とした

傲慢で独善的な科学者は嘯いた

広島長崎の悲しい重い教訓を 御魂と交わした誓約を

良心の奥深く掘じ伏せて

耳障りの良い核の平和利用を謳い上げ

原発の安全神話を捏じ上げた

歴史の通過点である資本主義の呪縛の中で

麻薬患者が阿片を求めるように

物欲 金欲： 無限欲の奴隷になり下がり

国家権力は国策として 無限欲の火付け役

巨大資本や電力会社と手を結び

五十四基の原発を 狭い地震列島に打ち建てた

その原発の全てが過疎地にあるのは

事故が想定内だったのではあるまいか

これまで原発周辺住民は 国 電力会社を相手取り

地震が起きたら危険ではと 激しく裁判で争った

裁判所は「安全性に問題無い」と判断し

この途轍もない人災に手を貸したのだ

四月七日の宮城沖地震で 女川原発 東海原発

それに六ヶ所村の使用済み核燃料再処理工場の三施設は

外部電源が途絶して危機一髪に陥った

この現実能耐え切れず

原子力安全委員長 原子力安全保安委員長は謝罪した

「事故を深く反省し今までの認識の甘さを認める」と

世界史に残るであろうこの惨事

今更の言葉や態度は意味を持たず 虚しさだけが支配する

さあ 心ある者達よ 目を覚まそう

原発にエネルギー対策に 他人事のように無関心で

自己欲に溺れていた者達よ 今歴史の転換点に立って

力合わせて立ち上がる時だ さあ声を上げよう

真のデモクラシーの実現に

(二〇一一年・五・三)

ゼロからの出発

島田 誠

「経済的な破綻、破滅的な地震が日本にかけて経験したことのない深刻な試練をもたらすだろう。誰も彼も皆ゼロから再出発しなければ、日本という国は精神文化的に立ち直りが出来な
いだろう」。

四十年前のジェームズ・カーカップ（英国の思想家・詩人）の言葉だが現在を予言しているようだ。カーカップは東北とも縁が深く一九五九年に東北大学教授として招聘され、以来三十年間日本で教鞭をとられ二年前に亡くなられた。

東北を襲った地震・津波・原発による天災人災が錯綜した多重災害に世界不況が追い討ちをかけている。ゼロからの出発、生き方を問い直すという論調が飛び交っている。いや大震災から一年が経って、すでに「飛び交っていた」と過去形に向って進行中である。

十六年前の私たちの体験と直後の論調も経済至上主義と物質的な豊かさを求めてきたことへ

の反省と新しい価値観による新しい市民社会の構築がさかんに言われた。しかし、喉もと過ぎれば熱さ忘れるの例えのとおり、さらに競争・成長・欲望社会へと向かい、格差とストレスに溢れる社会を招いた。神戸でいえば神戸空港、地下鉄海岸線、新長田高層ビルの乱立といった都市計画がそのまま進行した。

「ユウフォリア・ビジョン」を目指して

阪神淡路大震災直後の一九九五年二月十八日、「アート・エイド・神戸実行委員会」を立ち上げた。「このような時期に何故アートなのか？」との問いかけには「人が生きていくには空気が水やパンが必要だが、それだけでも生きてはいけない・心の問題、すなわち希望が大切だ」と答えた。市民自らの力で新しい文化の地平を拓くという活動を七年間続けた。

私は神戸の震災体験を「共同臨死体験」と呼んでいる。近代都市において、これだけ多くの人が「臨死」という体験を共有したことは稀だ。私達が感じた「ユウフォリア（至福感）」、そのとき人々が垣間見たアルカディア（ユウフォリア・ビジョン）は、理念として私たちの歴史を確実に回転させる力を持っている。

「ユウフォリア・ビジョン」とは

① 経済至上主義からの脱却

② 自然との共生社会の実現

③ それらの総体として、芸術に携わるもの全てが、人間として、さらには表現者としての原点に立ち、自分の存在理由を問い直し、人と人との心をつなぎ、本然を現出するというアートの原点にシンプルに回帰すべきことを指す。

根源的に社会の在り方、すなわち私たちの生き方を問いなおすという「ユウフォリア（至福感）」は、数ヶ月で現実には挫折、消滅していった。震災の経験はNGO/NPOの活動領域の拡大、市民参加型協働の防災・減災のまちづくりという形として残り、それらが「新しい公共」という社会的位置づけを獲得するのに十六年を要し、まさにその年に東北大震災が起こった。

「アーツエイド東北」設立へ

私は昨年、「災害対策全書」（兵庫二十一世紀創造推進機構）に「芸術文化による復興支援策」

を書き、これで震災との関わりは卒業したと思った。私は研究者ではないので現実には有効であると思つた。これに書いた宛先を書いたわけだから、行動することは必然だつた。しかし「全書」(二〇一一年五月三十日刊)はその時点で未刊のため、許可を得て広報したら大きな反響があつた。

四月五日にギャラリー島田でアート関係者の集まりをもち、四月十七日、大阪から夜行バスで仙台に向かい、十八日から三日間、宮城県の津波災害地を福島県境の山元町から北へ七ヶ浜までをつぶさに見た。百聞は一見に如かずというとおり。津波でコンクリートの堤防は破壊され、道路沿いの電柱はなぎ倒されガードレールは吹っ飛んで家に巻きつくように張り付き、工場の鉄骨が鉛細工のように曲がっている。その海沿いの道にびくともせずには桜古木が並び満開に咲き誇る。恐ろしいまでの黙示録的風景だつた。阪神大震災とは大きく異なる災害で、また風土、文化も異なるので、現場を目撃しなければ、多分、判断を間違つたと思う。そのことを踏まえて、仙台メディアテークを拠点に多くのアート関係者と話し合いをし、東北のことは東北の方の手で「アーツエイド東北」の運動を促した。私たちは、寄り添い、分かち合う。なにより、ひとりよがりや自己満足を排し、そうした活動を支えるお金の流れをつくり、ニーズに応えていくことを大切にすることを伝えた。「アーツエイド東北」は六月二十二日に仙台メ

ダイアテークで発足した。

七月七日の七夕の日に公益財団法人「神戸文化支援基金」設立記念の「志縁パーティー」を北野ガーデンで行い、「アーツエイド東北」から代表世話人の志賀野桂一さんと事務方の鈴木拓さんをお招きし三〇〇万円の志縁金を贈った。九月には財団法人化して、東北六県を視野にいて文化活動助成をスタートさせる。私たちが続けてきた「1・17竹下景子メモリアルコンサート」は次回が神戸での最終回とし、「アーツエイド東北」へ引き継がれ三月十一日に仙台で開催されることとなる。

私のやろうとしていることと他の支援との違いは

1 国や行政の震災復興基金による助成は長期にわたり制度的なもので人体になぞらえれば「骨格」。

2 企業メセナ協議会ルートによるものは企業の寄付によるプログラム助成で「筋肉」、アートNPOリンクによるエイドはアーティストとその活動によるもので「動脈」。

3 私の提唱する「アーツエイド東北」は緊急・短期のもので、多くの無名の市民や組織化されていないアーティストによる。現地のニーズに合わせてメリハリをつける即断

即決型で毛細血管に例えることが出来る。

(注) 「芸術文化による復興支援策」の全文はギャラリー島田のHPでお読みいただけます。

自分をリセットして

神戸での震災を受け止めてゼロからの出発を自らに課した。それまでは商業者としても文化関係でも組織内改革を担ってきたが、再出発にあたって従来の枠組みのなかで動くことに限界を感じ、自分の存在を賭けた社会との関わりで最も意味のある行動はなにかを問うた。そして海文堂書店の経営を離れ、北野でギャラリー経営に専念するとともに、全ての役職を離れ、個人として「自立市民」への呼びかけを続けている。その根っこは「最も必要でありながら誰もやっていないこと」である。

神戸（大きくは兵庫県下）の文化的土壌を豊かにする取り組みをしてきた。意欲的な表現活動を支援し助成する全国ではじめての市民メセナとしての公益信託「亀井純子基金」（一九九二年設立）。被災地の文化復興「アート・エイド・神戸」のための「神戸文化復興基金」（一九九五年設立）。それらを発展させるための一般財団法人「神戸文化支援基金」（二〇一二年三月設立）

が亀井基金を吸収合併する形で今年七月一日に公益財団法人として認可された。ギャラリー島田を交流拠点とした「アート・サポート・センター神戸」で二百三十回のサロンを主催し、NGO/NPOのファンドレイジングのための「ぼたんの会」などを提案した。これら全ては最も必要でありながら、最も脆弱と思われる自立した市民が支える文化的基盤を豊かにすることであり、提言し、実現していく市民力を育てるための「装置」なのだ。

こうした「播かれた種」が育ち、それぞれの大地で根付き、「散水装置」によって緑の大地を蘇らせることを願っている。こうしたこと全ては市民の自覚、自立への呼びかけであり、よるべきな大海を航海する小船への灯台の灯でありたいと願っている。

(注) 二千九百人を超える読者をもつメールマガジン (HPで登録でき無料) は、六五〇号を超え、そうした情報の有効な発信媒体である。

最後に

私にとって四冊目となる本を上梓した。『絵に生きる 絵を生きる五人の作家の力』と題さ(注)れているが、芸術家だけではなく、日々の営みのなかで真摯に生きようとする無数の無名な

人々の孤独な闘いへの励ましとして書いたものだ。多くの皆さん方に読んでいただくことを心から願っている。

(注) 風来舎刊 二百四十四頁 215×155mm 上製本 定価二一〇〇円(税込み) ギャラリー

↑ 島田へお申し込み下さい(送料無料、代金後払いでお送りします)

三度目のカナリア

——東電第一原子力発電所事故に思う——

浜本 純逸

石炭坑夫は坑内に降りていくときカナリアを連れて行ったと言われている。坑内にガスが発生しているとカナリアが仮死状態になり、非道いときは死んでしまい、坑夫の生命の危険を予知できるからである。一九四五年の原爆投下以来、日本はアメリカによって三度のカナリアテストを受けてきた。二度目は、ビキニ環礁におけるアメリカ水爆実験による第五福竜丸被災である。三度目は二〇一一年三月、東京電力福島第一原子力発電所の水素爆発である。日本人は、もうこれ以上のアメリカによる人体実験はごめんです、とはね返す意欲を確かにし、そのための平和力を強めていくべきではなからうか。

一九四五年八月六日、広島に世界で最初の原子爆弾が投下された。つづいて同年八月九日、長崎に原子爆弾が投下された。被爆時には広島市内に三十四万三千人余、長崎には二十七万人

前後の人が住んでいた。これらの人々が被爆者となったのである。被爆後三ヶ月の間に、広島でおよそ十三万人、長崎でおよそ七万人が死亡した。原爆投下直後に救援活動で両市に入った約十二万の人々が二次被爆者となり生涯にわたって原爆症に苦しんだ。

アメリカはナチスドイツの核兵器開発を警戒して原爆製造に踏み切ったのであるが、完成したときにはナチスはすでに降伏していた。原爆投下の理由として、(1) 日本軍部の抗戦意欲をくじくため、(2) 連合軍の犠牲を少なくするため、(3) ソ連との原爆製造競争のため、などの理由が挙げられている。(1)と(2)はその頃すでに敗北を自覚していた日本軍部が降伏模索のサインをアメリカに送っていたので理由にならない。(3)の、戦後対ソ戦略としてなされたというのは一つの理由であっただろう。

しかし、私は最大の理由は、原爆の人体への威力および軍事的効果のテストにあったと考えている。その根拠の一つは広島投下の原爆がウラン爆弾であり、長崎投下の原爆がプルトニウム爆弾であったことである。単なる戦闘目的ならば、すでに戦意喪失していた日本に対して原爆を一つ落とせば果たすことができた。わざわざ二つも、しかも異なった性質の原爆を投下する必要はなかった。又、戦争終結後、アメリカは直ちに調査団を派遣し、詳しい被爆調査をお

こなっている。放射能の人体への影響については長年の影響が予想されるためにABCを広島市の比治山に設置して現在でも調査を続けている。

つまり、悲しいことに、広島・長崎は次の戦争に備えてのカナリアにされたのである。

一九五四年三月から五月にかけて、アメリカは太平洋のビキニ環礁で一連の水爆実験をおこなっていた。三月一日の水爆実験によって被災した第五福竜丸が焼津に帰ってきたのは、三月十四日であった。読売新聞がこのことをスクープして三月十六日の朝、次のような見出しで報道し、日本中が大騒ぎになった。

邦人漁夫、ビキニ原爆実験に遭遇

二十三名が原子病、一人が東大で重症と診断

無線長・久保山愛吉（三十九歳）さんを初めとする船員二十三名は、それが何であるかわからないまま死の灰を浴び、放射能の付着した船内で十四日間を過ごしたのであった。そのため陸後、皮膚障害（浮腫、ただれ、脱毛）・胃腸障害・肝臓障害・白血球の激減、などのいわゆる「原爆症」の症状を現した。久保山さんは、黄だんが悪化し白血病のような症状になって国立

東京第一病院で死亡した。日本の学者は、ガイガー計数機を使って船の各部分の放射能残留状況や手探りで船員の治療に当たり病状を追跡調査していた。アメリカ政府は、日本の学者や医師に被爆者被災状況調査報告書の提出を執拗に迫った。水爆が人体に与える脅威の実態を知りたかったのである。第五福竜丸とその船員は、心ならずも水爆の恐ろしさを世界に知らせるカナリアの役割を背負わされたのであった。

福竜丸の持ち帰ったマグロに放射能が検出され、全量廃棄、市場が閉められた。魚が食べられなくなったこと、「黒い雨」の下では子どもが健康に育たないのではないかという心配が生じたこと、などによって母親達が原水爆禁止の声を上げ始めた。さらに各地方自治体や地方議会が原水爆反対に関する決議を採択していった。このような世論の結集が一九五五年八月六日に開催された第一回原水爆禁止世界大会となった。

ところで、歴史の妙というか、一九五五年の三月二日に原子炉建設予算が、修正予算案のうちに改進黨の中曽根康弘、斎藤憲三議員らから提出され、三月五日に可決されていた。その内容は、原子炉建設二億三千五百万円、ウラン資源調査費一千五百万円、チタン・ゲルマニウムなどの資源開発費三千万円、資料費二千万円、合計三億円であった。この追加予算による原

子炉設置決定は、全く抜き打ち的におこなわれた。中曾根康弘は「学術会議においては研究開発にむしろ否定的な形勢が強かったようであった。私はその状況をよく調べて、もはやこの段階にいたったならば、政治の力による以外に、日本の原子力問題を解決する方法はないと直観した」と述べている（広田重道『第五福竜丸―その真相と現在―』一九八八年八月二五日 白石書店 四六頁）。

なぜ、この時期にアメリカが水爆実験をおこなっていたのか、なぜ日本で原子炉建設を急いでいたのか。それは、一九五三年にソ連が水爆実験に成功し、朝鮮戦争後の冷戦過熱の中で軍拡競争がおこなわれていたからである。日本の巷間では、「原子炉は、容易に核兵器に転用できる」と言われていた。

二〇一一年三月十一日、東日本は地震と津波による大災害に見舞われた。その地震と津波によって福島県の東電第一原子力発電所は炉心溶融事故を起こした。

三月十二日十五時三十六分頃、第一原発一号機で水素爆発（炉心溶融）、白い噴煙が上がって原子炉建屋の上部が吹き飛ぶ。

三月十四日十一時一分、第一原発三号機で水素爆発（小規模の核爆発か？）。原子炉建屋の上
部から赤い炎が出た後、きのこ雲のような黒い噴煙が真上に数百メートルほど立ち上
り、建屋上部が完全に崩壊。

二十三時頃から翌朝にかけて、東電第一原発正門付近で〇・〇二マイクロシーベルト／
時の中性子を観測。

三月十五日 六時頃 第一原発四号炉の使用済み核燃料プールで水素爆発。風に乗って放射
能は南下し、首都圏から静岡県まで放射能で汚染される。

一〇時二二分、三号機付近で四〇〇ミリシーベルト／時（一般年間被爆限度の四〇〇倍）。
単位がマイクロからミリへと桁違いに放射線量が上昇した。

菅直人首相は、第一原発から半径二〇―三〇キロの範囲内の住民に屋内退避要請。

実は、東電の福島第一原発から第六原発までの基本設計と建設はアメリカのGE（ジェネラ
ルエレクトリック）社の技術者たちによってなされたのであった。アメリカは事故の人体への影
響を熟知していたために、事故発生後直ちに東電第一原発の周囲八〇キロ以内のアメリカ人に
退避や帰国を呼びかけている。その後、東電第一原発のアメリカ人設計技師が原子炉の破壊状

態調査にやってきている。三月十三日から四月五日まで宮城県北部沖に、いわゆる「トモダチ作戦」を展開し、支援物資を運んだ。また在沖繩の海兵隊二二〇〇人は三陸沖に展開して物資空輸・電力復旧・がれき撤去などに当たった。

この「トモダチ作戦」について、寺島実郎氏は、「献身的な救援には感謝の言葉しかないし、こうした局面に米国民が見せる温かい心には頭が下がる」とした上で、アメリカの戦略的・外交的意図を見逃してはならないと警告している。「トモダチ作戦」によって、二〇一〇年に冷え込んでいた日本人の沖繩基地観は拒絶的ではなくなった。

さらに、寺島氏は、アメリカの外交判断について次のように述べている。

国家が軍を動員して動くことは単純な善意や友愛だけではない、冷酷な外交判断が存在する。——中略——

戦後日本の原子力開発が米イリノイ州にあった「アルゴンヌ原子炉学校」での技術者養成に支えられたことに始まり、懸案の福島第一原発の一号機から六号機の基本設計は全てGE（ジェネラル・エレクトリック）社のBRW（沸騰水型原発）である。とくに一号機（一九七一年稼動）はGE社が六〇名もの技術者を送り込み、「GEビレッジ」まで建設してフル・

ターンキー・ベースで完工させたものだ。米国は軍事としての核開発には先行したが、原発利用は英国（一九五三年コールドホール型原発）とソ連（一九五四年オブエンスク原発）に先行され、急ぎ軍事用原発の技術移転という形でウエスティングハウス社（加圧水型）とGE社（沸騰水型）による商業用原子力発電プロジェクトを推進させた。日本はそれを受け入れ、運命を共有する形で今日の原子力発電体制を築いてきたのである。一九七九年のスリーマイル島の事故以来米国は一基の原発も新設していないが、それ故現在稼働中の原発（一〇四基九八千万KW）は老朽化し、GE社の古い型のBRWも二〇基以上稼働している。（寺島実郎「震災考―指導者の役割と国際関係」『世界』二〇一一年九月号）

東電第一原発事故の規模・原子炉の破損状況・放射能の人体への影響（症状と範囲）などはアメリカも把握したいことであり、その事故状況如何はアメリカでの原発新設や脱原発世論に大きく影響する。結果として、東電第一原子力発電所および日本人は、アメリカにとってのカナリアとなったのである。

その後、東電第一原発の炉心溶融事故は、大量の放射性物質を大気・海洋中に放出し、広範な地域に土壌・水・農畜産物・水産物の放射能汚染問題を引き起こしている。福島県では、八

月現在、東電第一原発から二〇km以内に法的強制力のある「警戒区域」が設定され、三km以内では一時帰宅さえ禁止されている。その外側の放射性物質累積量の高い地区は「計画的避難区域」に指定され、さらにその周辺には「緊急時避難準備区域」が設定された。これらの区域合計は二十一市町村、約二十一人に達し、福島県総人口の一割を超える。うち六万人が県内で避難生活を強いられ、県外では三・五万人に達している。

これらの区域では、住民は先の見通しが全く立たないまま、追われるように域外避難を余儀なくさせられた。ここでは、生命と暮らし、生業と就業の基盤が破壊され、地域のコミュニティが引き裂かれ、自治体さえ浮遊し、住民は将来の希望を見いだせないでいる。

これから、私たちは、まず第一に福島の人々の災難に思いを寄せ、精神的物質的支援を送り続けたい。そして、脱原発の運動を進めると同時に自然エネルギーの開発に努力し、その技術を諸外国に輸出できるまでに高めていきたい。長期的な見通しをもって、アメリカへの隷従を断ち切る思想を鍛え、経済自立の道を切り拓いていくべきであろう。

(二〇一・一〇・〇八)



銀のスプーン 32集



2012年3月5日 発行
頒価 2,100円 (〒税共)

編集人／恩田 怜

編集局／〒655-0872 神戸市垂水区塩屋町2-6-27
TEL/FAX 078-751-2853

発行人／銀のスプーンベンクラブ
(代表 三宅 啓弘)

〒666-0036 兵庫県川西市花屋敷1丁目10-3

ゆうちょ銀行口座／00910-6-2570 銀のスプーン発行所

発行所／イーブックカフェ京都
〒615-0052 京都市右京区西院清水町156-1



©三宅啓正2012
JASRAC 出1201769-201

ISBN978-4-904505-23-6